

# 胎児不整脈の新診断法開発

胎児の特定の血管に特殊な超音波を当て、不整脈を的確に診断する新たな方法を開発したと、徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部の加地講師によると、新しい手法では、特殊な超音波探頭を使う。胎児の肝臓に近い静脈と動脈に着目し、超音波を当てると画像で血流や脈の周期性がはっきり分かり、胎児不整脈を簡単に診断できるとを突き止めた。16週目以降の胎児の診断が可能で、測定時間も2〜3分と短く、母体への負担も少ない。

**徳島大学院  
加地講師**

加地講師によると、新しい手法では、特殊な超音波探頭を使う。胎児の肝臓に近い静脈と動脈に着目し、超音波を当てると画像で血流や脈の周期性がはっきり分かり、胎児不整脈を簡単に診断できるとを突き止めた。16週目以降の胎児の診断が可能で、測定時間も2〜3分と短く、母体への負担も少ない。

## 特定の血管に超音波



胎児不整脈の新たな診断法を説明する加地講師  
—徳島大学病院

## 母体に負担少なく

これまで、心臓に近い静脈と動脈に超音波を当てていたが、画像で両方の血流などが重なって表示されることもあり、症状の判断が難しいこともあった。また、測定はおむね18週目以降の胎児に限られ、体位によって測定できないことが多い上、30分程度に正確な診断を行い、治療計かかるといったことが多かったという。画を立てることが重要といわれている。

胎児の不整脈は徳島大病院だけで年10〜20例見つかるといふ。加地講師は「新診断法が広がり、早期治療につながることで、重症の場合は死亡することを期待している」と話している。(森麻実)